

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

令和4年3月16日

農林水産省

北海道（前回変動:令和3年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和4年産水稻の10a当たり平年収量は556kg（対前年差+4kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していることや、冷害による極端な減収のリスクが低下していること、安定生産に向けた栽培技術が定着していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、品種構成に大きな変化はみられない。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H29	30	R1	2	3
ななつぼし	590	46.3	45.1	45.8	45.0	44.8
ゆめぴりか	568	20.7	21.8	21.7	20.9	21.9
きらら397	612	9.5	9.4	9.5	10.0	9.8
ふっくりんこ	563	6.4	6.1	6.2	5.9	5.8
*風の子もち	598	3.1	3.3	3.1	3.3	3.3
*はくちようもち	587	2.4	2.4	2.4	2.3	2.3

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

3 *印はもち米である。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H29	30	R1	2	3
石狩	551	6.9	7.0	7.0	7.1	7.0
南空知	556	18.1	17.9	17.9	17.7	16.6
北空知	586	25.6	25.7	25.9	26.0	26.5
上川	587	28.6	28.2	28.4	28.2	28.8
留萌	541	4.1	4.1	4.0	4.0	4.1
渡島	497	2.8	2.8	2.9	2.9	2.9
檜山	509	3.8	3.9	3.8	3.9	3.8
後志	533	4.3	4.5	4.5	4.5	4.5
胆振	513	3.5	3.6	3.4	3.5	3.5
日高	507	1.3	1.3	1.2	1.2	1.3
オホーツク・十勝	532	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。

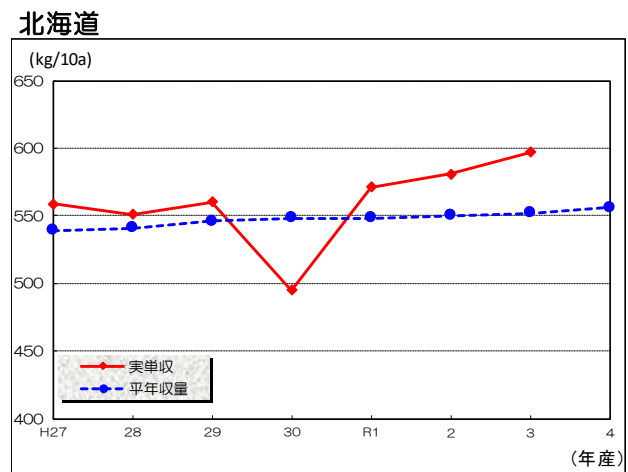
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

北海道における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成18年から28年の平均値と平成23年から令和3年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が0.9ポイント減少しているものの、千もみ当たり収量が1.2ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.5ポイント増加している。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



北海道	H27	28	29	30	R1	2	3	4
実単収	559	551	560	495	571	581	597	
7中5平均	564 (12)							
平年単収	539	541	546	548	548	550	552	556
前年差	2	2	5	2	0	2	2	4

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年刈差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

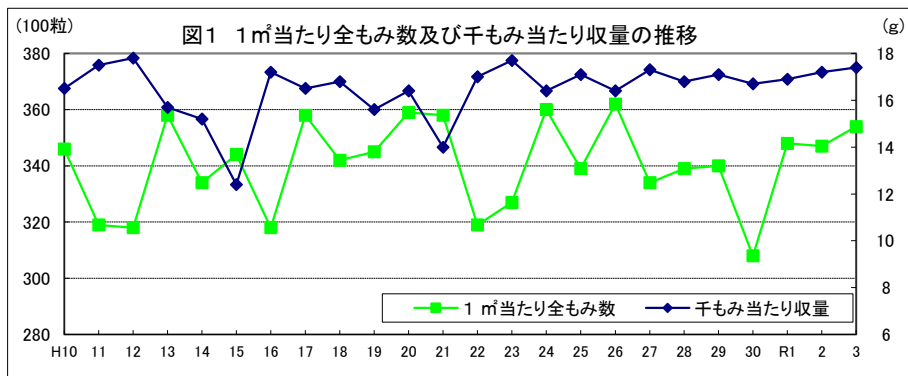
	H18～H28年 平均値 ①	平成29年	30	令和元年	2	3	対前年差	H23～R3年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	22.4	22.0	22.2	21.9	21.9	21.8	△0.1	22.1	98.7	△1.3
1㎡当たり有効穂数(本)	559.9	538	500	599	538	574	36.0	557	99.5	△0.5
1穂当たりもみ数(粒)	61.5	63.2	61.6	58.1	64.5	61.7	△2.8	60.7	98.7	△1.3
1㎡当たり全もみ数(百粒)	345	340	308	348	347	354	7.0	342	99.1	△0.9
千もみ当たり収量(g)	16.7	17.1	16.7	16.9	17.2	17.4	0.2	16.9	101.2	1.2
玄米千粒重(g)	21.8	22.1	21.6	21.2	21.9	21.8	△0.1	21.8	100.0	0.0
10a当たり玄米重(kg)	571	580	513	588	598	616	18.0	580	101.5	1.5
前40日平均気温(°C)	0.7	1.5	0.7	0.7	0.5	2.3	1.8	0.8		0.1
後40日平均気温(°C)	0.9	△0.9	△0.8	0.5	1.6	1.0	△0.6	0.3		△0.6

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対前年差)。

注：2 H18～H28年平均値及びH23～R3年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：『作物統計』

表4 最近の作柄(平成27年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況最終指数)
H27	×	◎	104
28	—	○	102
29	—	○	103
30	※	—	90
R1	○	—	104
2	○	○	106
3	○	○	108

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、
—：平年並み、×：やや不良(やや少ない)、
※：不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

- ・ 健苗の育成を図り、良質・良食味米の安定生産に向け①育苗管理の徹底②深水管理とそれを可能とする畦畔整備③地力増進やほ場の透水性改善④防風対策等の栽培環境整備⑤適正施肥などの基本技術を守った栽培管理⑥いもち病予防のための薬剤消毒の徹底等の指導が行われている。
- ・ 農家戸数が減少する一方で1戸当たりの作付面積は増加傾向で推移し、労働不足に直面していることから「密苗」による栽培増加が見込まれる。
- ・ 成苗移植の普及など安定生産に向けた栽培技術が定着している。

青森（前回変動:令和3年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和4年産水稻の10a当たり平年収量は603kg（対前年差+1kg）となった。これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「つがるロマン」から、収量水準の高い「まっしぐら」への移行が増加傾向にあり、令和4年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H29	30	R1	2	3
つがるロマン	595	27.6	26.6	25.2	17.3	13.6
						-14
まっしぐら	620	64.1	64.9	67.5	75.5	78.6
						+14.5
青天の霹靂	546	4.4	4.6	3.5	3.7	4.5

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H29	30	R1	2	3
青森	597	11.3	11.5	11.6	11.5	11.0
津軽	635	61.8	61.5	61.1	60.8	61.9
南部・下北	570	26.9	27.0	27.3	27.7	27.1

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、地帯間差があり、令和4年産は収量水準の高い津軽地帯の作付面積の割合が高くなることが見込まれる。（表2）

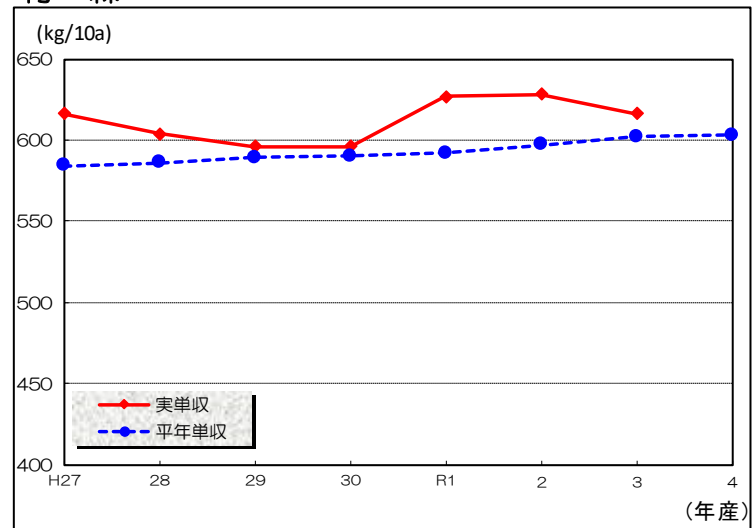
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

青森県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成18年から28年の平均値と平成23年から令和3年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が2.2ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が2.8ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.3ポイント増加している。

（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準
青森



青森	H27	28	29	30	R1	2	3	4
実単収	616	604	596	596	627	628	616	
7中5平均	612 (10)							
平年単収	584	586	589	590	592	597	602	603
前年差	0	2	3	1	2	5	5	1

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

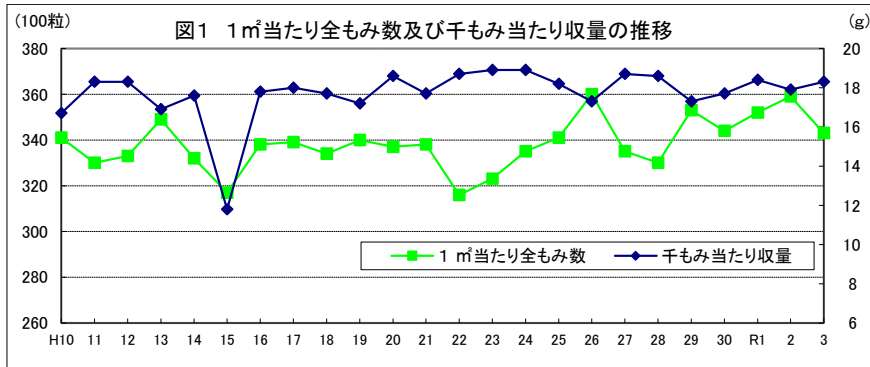
	H18～H28年 平均値 ①	平成29年	30	令和元年	2	3	対前年差	H23～R3年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	20.6	19.5	19.4	19.6	19.6	19.3	△0.3	19.6	95.1	△4.9
1㎡当たり有効穂数(本)	417	421	405	455	442	435	△7.0	432	103.5	3.5
1穂当たりもみ数(粒)	80.3	83.8	84.9	77.4	81.2	78.9	△2.3	80.2	99.9	△0.1
1㎡当たり全もみ数(百粒)	334	353	344	352	359	343	△16.0	344	102.8	2.8
千もみ当たり収量(g)	18.5	17.3	17.7	18.4	17.9	18.3	0.4	18.1	97.8	△2.2
玄米千粒重(g)	22.2	22.6	22.0	22.2	21.6	22.3	0.7	22.2	100.0	0.0
10a当たり玄米重(kg)	613	610	609	646	642	628	△14.0	621	101.3	1.3
前40日平均気温(°C)	0.6	1.7	1.5	0.8	△0.0	2.0	2.0	1.0		0.4
後40日平均気温(°C)	1.0	△1.6	△0.6	1.0	2.0	△0.3	△2.3	0.3		△0.7

資料:作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注:1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対年差)。

注:2 H18～H28年平均値及びH23～R3年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料:『作物統計』

表4 最近の作柄(平成27年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作況最終指数)
H27	—	○	105
28	—	○	104
29	◎	×	101
30	○	×	101
R1	○	○	106
2	◎	—	105
3	—	—	102

注:◎:良(多い)、○:やや良(やや多い)、
—:年並み、×:やや不良(やや少ない)、
※:不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

- ・ 良食味・高品質生産に向け①適地・適品種の作付誘導②高温や低温等気象変動に対応した適正な水管理や適期刈取等の徹底③施肥管理及び斑点カメムシ類等の防除の徹底等の指導が行われている。
- ・ 米価低迷と労働力不足に対応した省力・低コスト技術(ドローン等の最先端省力化農業機械の導入、直播栽培、疎植栽培等)の普及拡大指導が行われている。
- ・ 「やませ」の出現回数が少なく、かつ、平均気温も高くなっていることから単収水準が増加し、今後も同様の傾向は続くと考えられる。
- ・ 平成20年から飼料用米等の青刈り面積が増加し、好条件の田には主食用米等の子実を、条件不利な田には飼料用米等を作付けしている場合が多く、主食用米等の単収水準は飼料用米等の作付増加に伴い上昇していると考えられる。

埼玉（前回変動:令和2年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和4年産水稻の10a当たり平年収量は494kg（対前年差+2kg）となった。これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、業務用の多収品種が増加していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「キヌヒカリ」から、収量水準の高い「彩のきずな」への転換が増加傾向にあり、令和4年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H29	30	R1	2	3
コシヒカリ	488	37.0	34.8	33.7	32.7	31.0
彩のかがやき	519	32.6	32.8	32.7	31.6	31.6
キヌヒカリ	468	10.0	9.3	8.0	6.7	5.9
彩のきずな	522	11.4	13.5	17.4	20.7	22.7

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H29	30	R1	2	3
東部	494	66.4	66.2	66.2	66.3	65.7
西部	470	33.6	33.8	33.8	33.7	34.3

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

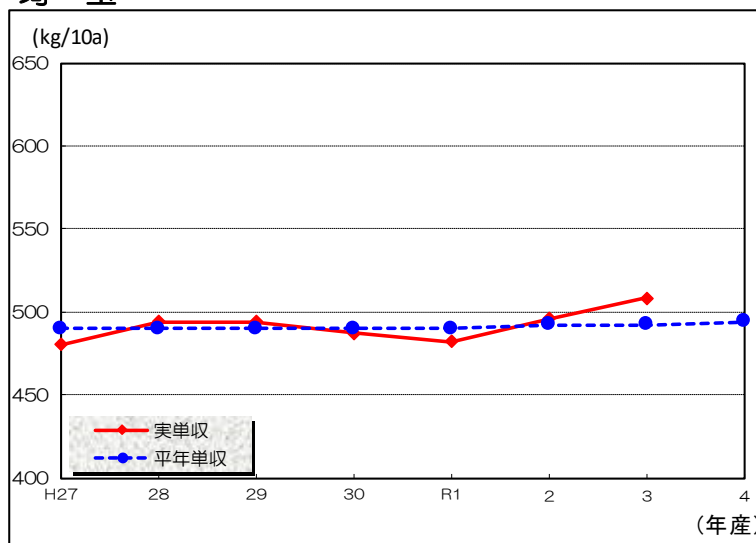
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

埼玉県における近年の10a当たり収量については、概ね平年並で推移している。（図1）

収量構成要素については、平成18年から28年の平均値と平成23年から令和3年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が2.3ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が4.1ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.1ポイント増加している。

（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準
埼玉



注：グラフの目盛りの最低収量を350kgとしている。

埼玉	H27	28	29	30	R1	2	3	4
実単収	480	494	494	487	482	496	508	
7中5平均	491 (-1)							
平年単収	490	490	490	490	490	492	492	494
前年差	0	0	0	0	0	2	0	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

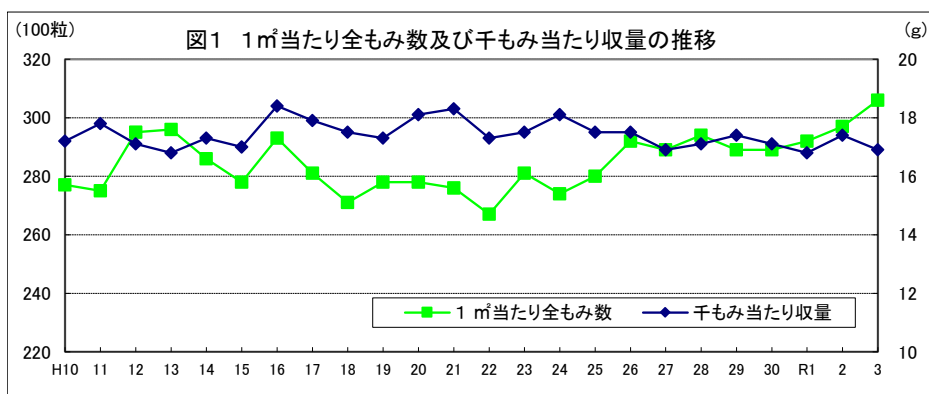
	H18～H28年 平均値 ①	平成29年	30	令和元年	2	3	対前年差	H23～R3年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	17.0	16.4	16.2	15.9	16.1	16.1	0.0	16.5	97.1	△ 2.9
1㎡当たり有効穂数(本)	361.6	384	389	368	367	391	24.0	373	103.1	3.1
1穂当たりもみ数(粒)	76.9	75.3	74.3	79.3	80.9	78.3	△ 2.6	77.8	101.2	1.2
1㎡当たり全もみ数(百粒)	278	289	289	292	297	306	9.0	290	104.1	4.1
千もみ当たり収量(g)	17.6	17.4	17.1	16.8	17.4	16.9	△ 0.5	17.2	97.7	△ 2.3
玄米千粒重(g)	20.8	21.0	20.6	20.0	20.0	20.7	0.7	20.7	99.5	△ 0.5
10a当たり玄米重(kg)	493	503	495	492	517	518	1.0	499	101.1	1.1
前40日平均気温(°C)	1.3	2.3	4.2	0.8	0.1	1.1	1.0	1.6		0.3
後40日平均気温(°C)	1.2	△ 0.5	0.8	1.4	2.9	△ 0.8	△ 3.7	0.7		△ 0.5

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対前年差)。

注: 2 H18～28年平均値及びH23～R3年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表4 最近の作柄(平成27年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作 最 終 指 数)
H27	○	×	97
28	○	×	101
29	○	—	101
30	—	—	99
R1	—	×	98
2	○	○	102
3	○	×	103

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良(やや少ない)、
※: 不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

- ・ 実需者・消費者に信頼される米生産に向け、栽培基準や栽培指針に準じた肥培管理を基本とし①種子更新の徹底②品質・食味向上のための栽培管理技術の徹底③品質・食味維持のための収穫及び乾燥・調整の徹底④安定生産のための土作りの徹底の指導が行われている。
- ・ 夏場の高温対策として、水管理の徹底、栄養診断に基づいた施肥の実施及び適期収穫の指導を行っている。
- ・ 「彩のかがやき」については、白未熟粒による規格外が発生しやすいことから、出穂期の高温を避けるため移植時期の検討が行われているが、用水の問題から移植時期の移行は容易に進まない状況となっている。

富山（前回変動:令和3年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和4年産水稻の10a当たり平年収量は547kg（対前年差+1kg）となった。これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「てんたかく」及び「てんこもり」、富山県のトップブランドに位置付けている「富富富」が増加傾向にあり、令和4年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H29	30	R1	2	3
コシヒカリ	548	74.3	72.1	69.1	68.7	66.4
てんたかく	593	9.7	10.4	10.4	10.3	11.4
てんこもり	607	5.7	6.4	6.6	7.2	8.1
富富富	548		1.4	2.9	3.3	4.6

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

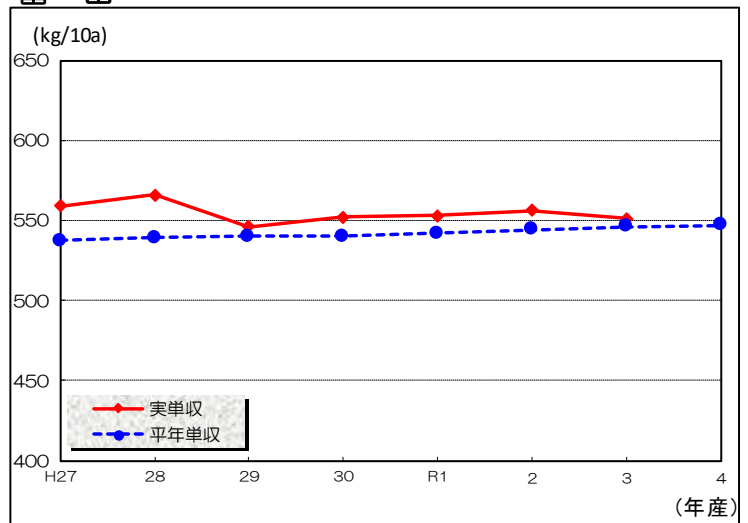
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

富山県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成18年から28年の平均値と平成23年から令和3年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.0ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が1.6ポイント増加している結果、10a当たり玄米重はほぼ同水準となっている。

（次ページ表2、表3、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準
富山



富山	H27	28	29	30	R1	2	3	4
実単収	559	566	546	552	553	556	551	
7中5平均	554 (8)							
平年単収	537	539	540	540	542	544	546	547
前年差	0	2	1	0	2	2	2	1

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表2 収量構成要素及びアメダスデータ

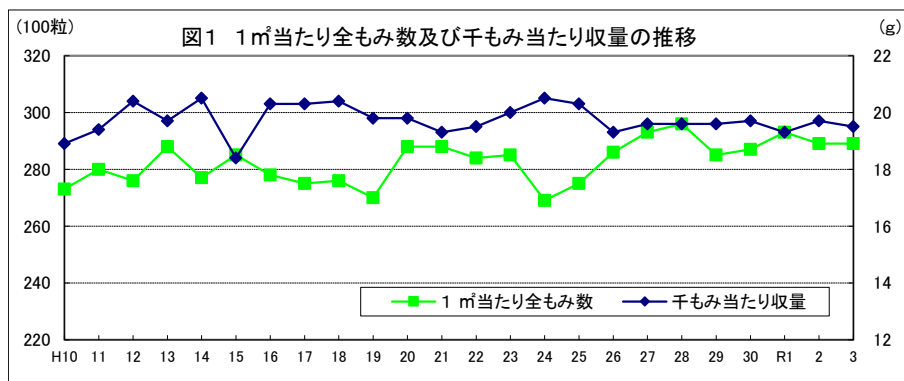
	H18～H28年 平均値 ①	平成29年	30	令和元年	2	3	対前年差	H23～R3年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	18.7	19.1	19.2	18.9	19.7	19.3	△0.4	19.1	102.1	2.1
1㎡当たり有効穂数(本)	359.9	384	371	386	377	365	△12.0	377	104.7	4.7
1穂当たりもみ数(粒)	77.6	74.2	77.4	75.9	76.7	79.2	2.5	76.7	98.8	△1.2
1㎡当たり全もみ数(百粒)	283	285	287	293	289	289	0.0	288	101.6	1.6
千もみ当たり収量(g)	19.8	19.6	19.7	19.3	19.7	19.5	△0.2	19.6	99.0	△1.0
玄米千粒重(g)	22.1	22.5	22.0	21.5	21.7	22.4	0.7	22.0	99.5	△0.5
10a当たり玄米重(kg)	559	560	565	565	568	563	△5.0	564	100.9	0.9
前40日平均気温(°C)	1.0	1.3	2.8	0.3	△0.7	1.2	1.9	0.8		△0.2
後40日平均気温(°C)	0.5	△0.4	0.7	1.3	2.3	△0.4	△2.6	0.2		△0.3

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注: 2 H18～28年平均値及びH23～R3年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表3 最近の作柄(平成27年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指)数
H27	○	×	103
28	◎	—	106
29	○	×	100
30	○	×	102
R1	○	×	102
2	○	—	103
3	○	×	99

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良(やや少ない)、
※: 不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高温に打ち勝つ米づくりに向け、以下の指導が行われている。

- ・ 出穂後の高温登熟の回避として、適期移植の実施。
- ・ 高温に打ち勝つ環境づくりとして、秋耕による稲わらの腐熟促進と深起による根域の確保。
- ・ 高温に打ち勝つ稲体づくりとして、適正穂数に向けた栽培密度(70株/3.3㎡)の確保。
- ・ 適期適切な中干しの徹底と過剰なもみ数の防止、出穂後の湛水管理による稲体活力の維持。
- ・ 低コストな米づくりとして、ICTやロボット技術を活用した農機やシステムの現地実証等によるスマート農業の推進。直播栽培などの低コスト・省力技術の普及拡大。
- ・ 土壌診断に基づく土づくりの実施・基肥の適正な施用。

長崎（前回変動:令和元年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和4年産水稻の10a当たり平年収量は485kg（対前年差+3kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「ヒノヒカリ」から、収量水準の高い「なつほのか」への転換が増加傾向にあり、令和4年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H29	30	R1	2	3
コシヒカリ	464	11.6	11.3	11.6	10.6	10.3
にこまる	525	20.3	20.6	19.7	19.2	19.9
つや姫	577	2.0	2.0	2.1	1.7	1.7
ヒノヒカリ	481	59.7	58.6	57.0	53.6	48.5
						-11.2
なつほのか	514	-	2.1	4.8	11.0	15.7
						+13.6

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H29	30	R1	2	3
南部	497	54.5	54.8	54.5	54.6	55.0
北部	445	31.1	31.2	31.4	31.3	31.0
五島	413	3.7	3.6	3.8	4.0	4.0
壱岐・対馬	498	10.7	10.4	10.3	10.1	10.0

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

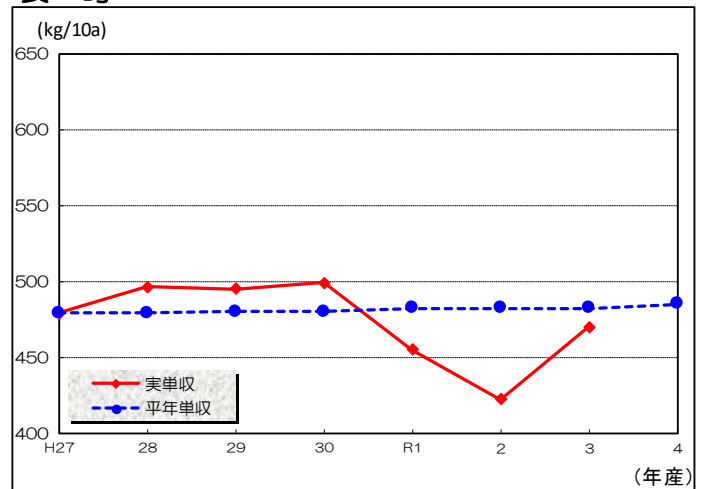
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

長崎県における近年の10a当たり収量については、概ね平年並みで推移している。（図1）

収量構成要素については、平成18年から28年の平均値と平成23年から令和3年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が2.3ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が2.8ポイント増加している結果、10a当たり玄米重はほぼ同水準となっている。

（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準
長崎



長崎	H27	28	29	30	R1	2	3	4
実単収	479	496	495	499	455	422	470	
7中5平均	479 (-3)							
平年単収	479	479	480	480	482	482	482	485
前年差	1	0	1	0	2	0	0	3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

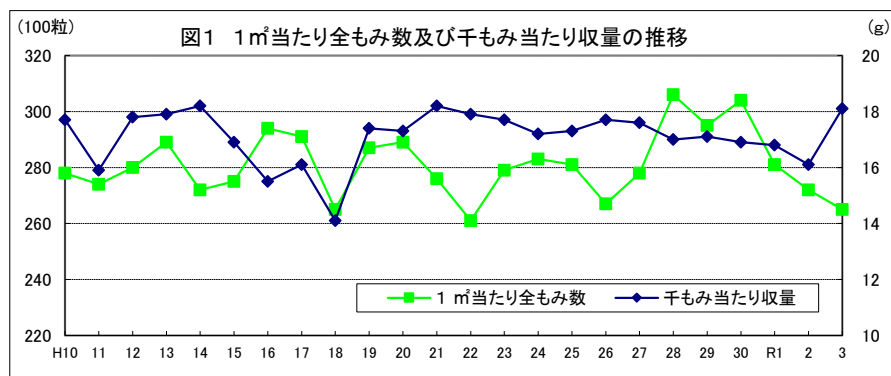
	H18～H28年 平均値 ①	平成29年	30	令和元年	2	3	対前年差	H23～R3年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	17.6	16.4	16.0	16.1	16.3	16.0	△0.3	16.5	93.8	△6.3
1㎡当たり有効穂数(本)	369.8	399	402	354	338	355	17.0	374	101.2	1.2
1穂当たりもみ数(粒)	74.2	73.9	75.6	79.4	80.5	74.6	△5.9	76.6	103.2	3.2
1㎡当たり全もみ数(百粒)	279	295	304	281	272	265	△7.0	287	102.8	2.8
千もみ当たり収量(g)	17.6	17.1	16.9	16.8	16.1	18.1	2.0	17.2	97.7	△2.3
玄米千粒重(g)	21.4	20.8	21.4	20.7	20.8	21.5	0.7	21.2	99.1	△0.9
10a当たり玄米重(kg)	489	504	515	473	439	480	41.0	493	100.8	0.8
前40日平均気温(°C)	0.5	1.2	1.7	0.2	0.4	0.0	△0.4	0.6		0.1
後40日平均気温(°C)	0.1	△0.3	0.2	0.8	△0.2	1.0	1.1	△0.1		△0.2

資料:作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注:1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注:2 H18～28年平均値及びH23～R3年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料:『作物統計』

表4 最近の作柄(平成27年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作況最終指数)
H27	—	—	100
28	◎	×	104
29	○	×	101
30	◎	×	104
R1	×	×	94
2	※	※	86
3	※	◎	99

注:◎:良(多い)、○:やや良(やや多い)、
—:平年並み、×:やや不良(やや少ない)、
※:不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

- ・ 県産米の評価向上のため、品質に加え食味に重点を置いた栽培技術が各地で実証されつつあり、今後は、各地域に導入している成分分析計の数値結果を基に、改善技術の普及・徹底を図る。
- ・ 長崎県は、台風等の気象被害を受けやすい状況にあったが、近年は、台風の接近や上陸数も少なくなっていることや、高温耐性品種への転換も進んでいる。